

佳作

「生きる力」をはぐくむ 社会科・総合学習の構想と展開

香川県坂出市立中央小学校 てらじまとしひで 寺嶋俊秀（代表）

1 はじめに

(1) 子どもの実態

本校は、今年創立125周年を迎える。坂出市の商業・交通の中心部に位置し、東には商店街、北は臨海開発地域、南は閑静な住宅地域からなっている。

意識調査などから、子どもの実態としては、「困ったことがあれば手順を考え見通しをもって解決する。」ことが不足していること、また保護者は子どもたちに「見通しを持って考える力を育てたい。」という強い願いを持っていることが分かった。さらに、社会からの要請として、国際化への対応、地球規模での環境保全、福祉・人権問題、情報化社会の進展などの問題に、主体的に対応できる能力

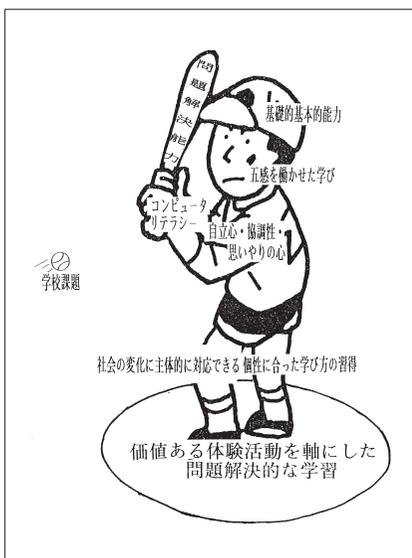
を身につけることが求められている。こうした実態を踏まえ、子どもたちに「生きる力」としての問題解決能力や豊かな人間性をはぐくんでいく教育活動が必要である。

(2) めざすべき子ども像

めざすべき子ども像を資料1のように考えた。

価値ある体験活動を軸にした問題解決的な学習を基盤とし、自分の個性に合った学び方を習得するとともに、社会の変化に主体的に対応できる資質能力を身につける。そのために、基礎的・基本的内容と学び方の定着を図るとともに、他人に対する思いやりの心や自律心を持ち、問題のよりよい解決のために主体的に活動できるような子ども像を考えた。

資料1
めざす
子ども
像



2 研究仮説

そこで、次のように研究仮説を設定した。

【仮説1】 国際化・環境・人間・情報化の四つの視点から学習内容を再構成し、発達段階に即した系統的な学習を行えば、子どもたちに社会の変化に主体的に対応できる資質・能力が育てられるだろう。

【仮説2】 問題解決的な学習を展開する過程で体験活動を取り入れることによって、子どもたちが学習への目的・参加意識を持ち、常に自分とのかかわりで自然・社会事象をとらえ、生きてはたらく資質・能力を身につけることができるだろう。

3 研究内容

(1) 研究構想

全人的な力としての「生きる力」をはぐくむために、地域の実態や子どもの生活を基盤としつつ、人間形成の重要な視点である「国際化・環境・人間・情報化」という四つの内容から学習材の再構成を図る。実践例では、複数の教科、道徳、特別活動に関連づけた統合的な指導を工夫する。また、従来までの三領域による教育課程を編成するのではなく、教科や領域の枠を超えた総合学習を取り入れ、それを中核にした教育課程を編成して実践研究を進める。

(2) 体験活動の重視

子どもたちは、自然に触れたり、友達と協力してものを作ったり、試行錯誤しながら物事を解決するなどの体験活動を通して、「生きる力」を身につけていく。このような「価値ある体験」は、一人一人の課題を生み出し、自らが考え、自己決定し、問題を解決していくうえからも重要になってくる。

(3) 問題解決的な学習

学習の基本過程として、次の五段階を設定し、学習を進めている。

問いを明確にする学習 体験したことをもとに自分の課題を持つ。

自ら創り出す学習 調べたことから一人一人が表現し、考えを創っていく。

練り合う学習 友達と話し合い、自分の考えを深めたり、広げたりする。

振り返る学習 自己・相互評価を行い、自己の変容や成長を自覚する。

生活化を図る学習 自分なりの見方・考え方を行動に移す。

「生きる力」は、こうした問題解決的な学習過程を展開する中で育っていくものと考え

る。また教師の構えとしては、学習過程を重視するとともに、子どもが自己選択・自己決定する場をできるだけ保障し、主体的な学習が行えるような支援を考えていかなければならない。

(4) 育てたい問題解決能力

価値ある体験活動を軸にした問題解決的な学習を通して、次のような問題解決能力が育成できると考えた。

感受性 自然や社会に豊かに問いかける。

情報探究力 学び方を身につけ、自らの力で学習する。

拡充性 友達とともに操作や表現しながら学び、考えを深める。

自己概念 自らの成長を見つめ、自分を知る。

実践力 学んだことを生活とつなげて考え、実行する。

また、こうした問題解決能力を育てる中で、意識的に他人に対する思いやりの心や自律心、感動する心、文化・伝統を重んじる心など、豊かな人間性もはぐくんでいかなければならないと考えた。

4 授業実践1

4年 社会科・理科統合単元「生命の水 流水・名水・節水」

(1) 主張点

自然界の中で水は、水蒸気、氷、水とさまざまに姿を変え、「循環」している。ここで得られる貴重な水は、人間を含めたすべての生物に恵みを施している。本実践では、「自然界の水の循環の中で、人間はどうかかわっていかなければならないのか。」を人間形成における「環境」の重要な視点とした。

社会科学習を自らの生き方につなげるために、「水」にかかわる体験活動を通してより

資料2 学習指導計画

<社会科>

- ・水は私たちの生活にとって必要不可欠であるが、普段あまり意識されていない。
 - ・多量の水が生活、農業、工業、衛生、災害対策などで利用されている。
 - ・市全体に網の目のように配水管が通り、人々の生活を支えている。
- 水で遊んだ楽しい経験を話し合う。
- 水道料金表、統計資料などから家庭や市全体の水道調べをして、水新聞に表現する。(2時間)

- ・水の確保のために昔から様々な努力がなされ、人々は水への強い願いをもっている。
 - ・渇水は、人々の生活に大きな影響を及ぼし、近年、頻発して起きている。
- 水道がなかったころの人々の生活を祖父や祖母から聞き取り、当時の地域の人々の生活の様子や地域の人々の思いや願いについて話し合う。
- 渇水時の新聞などを調べ、困った経験などについて話し合う。
- 私たちの生活に必要な「水」のもとを調べ、流れ図に表す。(2時間)

- ・水は川→ダム→川→浄水場→配水場→配水管→家庭→下水道→下水処理場という流れで循環している。
 - ・浄水場では、様々な施設を使って「沈殿、濾過、消毒」の処理を行い、安全な水を送っている。
 - ・行政や他県との協力のもと、安定した水の供給がなされている。
 - ・浄水場見学の手帳を立て、浄水場の仕組みや役割について調べる。
- 浄水場、下水処理場で水をきれいにする仕組みを、流れ図に表現する。(2時間)

- ・香川用水事業は香川県民の願いが込められている。
 - ・香川用水によって生活、農業、産業に恩恵がある。
 - ・源流に住む人々と下流に住む人々とのダムに対する意識には、隔たりがある。
 - ・私たちの水は吉野川上流にある早明浦ダムから、香川用水を通して送られてくる。
- 飲料水がどこからくるか、水のもとを調べて仕組み図に表現する。
- 早明浦ダム建設の概要を調べ、ダムのもつよさと問題点について話し合う。(2時間)

- ・森林は水をはぐくむ重要なはたらきをもっている。
 - ・森林によって濾過された名水が全国にある。
- きれいな水になる秘密を水の仕組み図につけ加える。
- 日本全国にある名水と呼ばれるおいしい水の秘密を調べ、森林のはたらきについて話し合う。

社会科の目標

私たちの生活は、自然と深いつながりがある。その恩恵である水資源を農業、産業、生活に必要な水として確保するために、様々な施策がなされてきた。現在も安定的に供給するために、計画的・広域的な事業がなされている。

ダム建設による水の確保だけでなく、水の循環性という視点から森林の役割を見直し、自然と共に生きるための開発のあり方を考え、生活を生態系の一環として認識し、行動できる実践力が求められている。

道徳の目標

自然のすばらしさや不思議さを知り、自然や動植物を大切にすることを高まる。

<道徳>

「川よ もう一度」
サケの放流という人々の行為を追求していく中で、自然と人間が共存していくことをつかむ。(1時間)

理科の目標

水は水面などから蒸発し、水蒸気になって空気中に含まれていることや、その水蒸気は温度によって状態が変わり、気象現象を起こしていくこと、さらに水は温度によって水や水蒸気になる。私たちの身の回りで見られる水は、姿を変えて、自然界の中を循環している。

関連指導

<理科>

○社会科で自分が考えた「水のもと」の流れ図から、生活に必要な不可欠な水の姿の変化やゆくえんについてもっと知りたい。

- ・水は空気中に蒸発していく。(2時間)
- 水たまりの水がなくなる事実から、そのゆくえんについて話し合い、予想する。
- 水が空気中や地中でいくことを調べる実験の方法を話し合い、確かめるための実験装置をつくる。

- ・水は空気中に蒸発するとともに、地中に浸透する。
- 各グループでそれぞれ立てた予想にしたがって実験を行い、継続観察する。(2時間)

- ・水が地中に浸透する度合いは、土の質や生えている樹木の様子によって違いがある。

○ペットボトル容器などを使って実験装置を考え、土の種類によって浸透する変化が確かめられる実験をする。(2時間)

- ・水是水蒸気になって空気中にも出ていく。
- ・空気中の水蒸気は冷やされて、水に変化する。
- 水の蒸発について話し合い、水のゆくえを確かめるための水の過熱蒸発の実験を計画する。
- アルコールランプの使い方を練習する。(1時間)

社会科— 9時間
 理科 — 9時間
 統合 — 3時間

- ・水はさらに冷やされると氷結する。
- 空気中の水蒸気が冷やされるとどうなるかを調べる実験をする。
- 水を冷やした時の変化と、氷結する時の温度を調べる。(4時間)

- ・限りある水は、地球上を姿を変えながら循環している。
- ・水は過熱、冷却によって水蒸気などに姿を変える。
- 水の循環の仕組みと人間とのかかわりを、流れ図につけ加える。
- 実験・観察をすることによって、水の姿の変化をまとめ、自然界の仕組みを話し合う。(1時間) 本時

- ・節水のために、雨水の有効利用や下水の再利用などの取組がなされている。
- 水を汚さない努力や節水の工夫について調べ、水と社会生活とのかかわりについて意見文を書く。
- 節水型社会の実現に向けて、自分たちでできることを考え、話し合う。(1時間)

実感のある追究をさせることによって、地域の一人としての「水資源」の確保や、環境保全についての実践的な態度を養うことができると考えた。「自らの手で水を生かし、守る」という自覚を持った、一人一人の節水意識を育てたい。

(2) 統合する価値

本単元では、社会科の「くらしをささえる水」と理科の「水のすがたとゆくえ」の単元を統合することを通して、水の循環について、より具体的で実感を持った学習が展開できると考えた(資料2)。現在使用している教科書でも、水の循環というサイクル図が社会科と理科に登場している。そこで「水は温度によって水蒸気(気体)、氷(固体)などとさまざまに姿を変え、私たちの地球をめぐる。」ことを理科の水の蒸発・加熱蒸発実験などを通して理解させ、その大きな循環の中で人々の社会生活が営まれていることをつかませることを、社会科学習での大きなねらいとした。

その一連の統合された学習の中で、より大きな水の循環の仕組みに気づいた子どもたち

は、家庭生活で水を汚したら、いずれは巡って自分のところに返ってくるという自然界の水の循環性に気づくことができると考えた。社会科、理科という教科の壁を越える水というテーマで、自分なりに水の蒸発の実験方法を考えたり、社会科での浄水の仕組みや森林のはたらきなど、水と人間生活とのかかわりについて調べたことを関連・統合させることによって、水に対する意識の連続性が図られ、より深い認識が得られるものとする。

(3) 学習指導の実際

まず、私たちに飲料水が届くまでの過程を自由に書かせた。

A児が書いた表現は資料3のとおりである。A児は、ダムにたまっている水をあるところできれいにしてパイプの中を通して運び、使った水を浄水場できれいにして流すという認識をしていた。

社会科では、湧水の経験を話し合ったり、「水のもと」を調べる過程で、鴨川浄水場を見学したり、早明浦ダム、香川用水の仕組みを学んだりした。また、理科では水の濾過、蒸発作用などについて学ぶ過程で、飲料水が届

くまでの仕組みと森林がはぐくむ名水の意味などについて理解することができた。そして、これらの学習をもとに各グループで作った水の流れ図を見ながら話し合い、一人一人の学びの課題を明確にした。

森林のはたらきから水の浄化作用に興味を持った子ども、人間が汚して流した水のゆくえについて問いを抱いている子どもなど、さまざまな問いが生まれた。そして「私たちが使った水は、海に流れ出た後どのよ

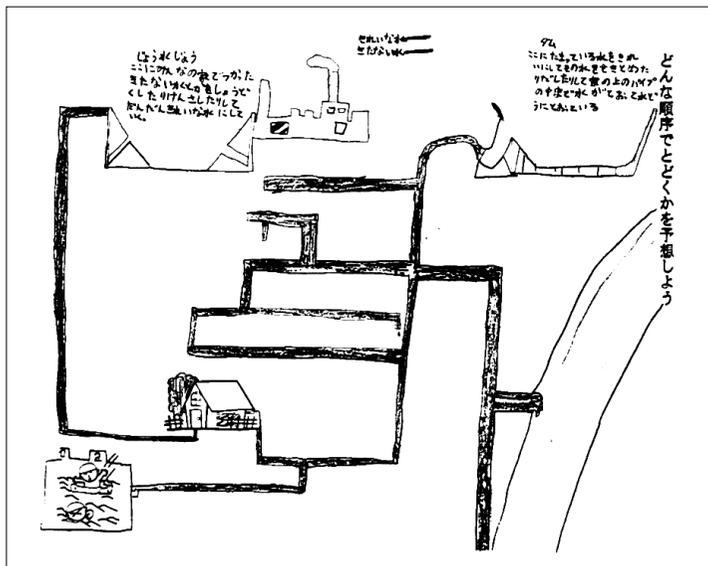
うになるのだろう。」という課題を追究するために、理科の「水のすがたとゆくえ」にある加熱蒸発実験（資料4）を行った。

実験結果から、ピーカーで沸騰した水が水蒸気に姿を変えて、空气中に消え、装置の上にのせた水で冷やされて再び水滴が変わるとい現象が見られた。子どもたちは、ピーカーの中の様子、水蒸気に変化する様子などについて、目をこらして真剣に観察し、記録することができた。実験装置のアルコールランプが自然界でいえば太陽にあたること、高度が上がると気温が下がることなどを話し合いながら、加熱実験を進めていった。

資料4 理科の加熱蒸発実験



資料3 A児の学習前の水の流れ図



そして、各グループで作ってきた水の仕組み図に、水是水蒸気という気体に変化し、また大気中で水に変わるとい「水の循環」の仕組みについて分かったことをつけ加え、水の流れが一つのサイクルになるよう、矢印を書き加えることができた。この話し合いで、「水はごみみたいにリサイクルされている。」など、ごみと関連した発言も出た。

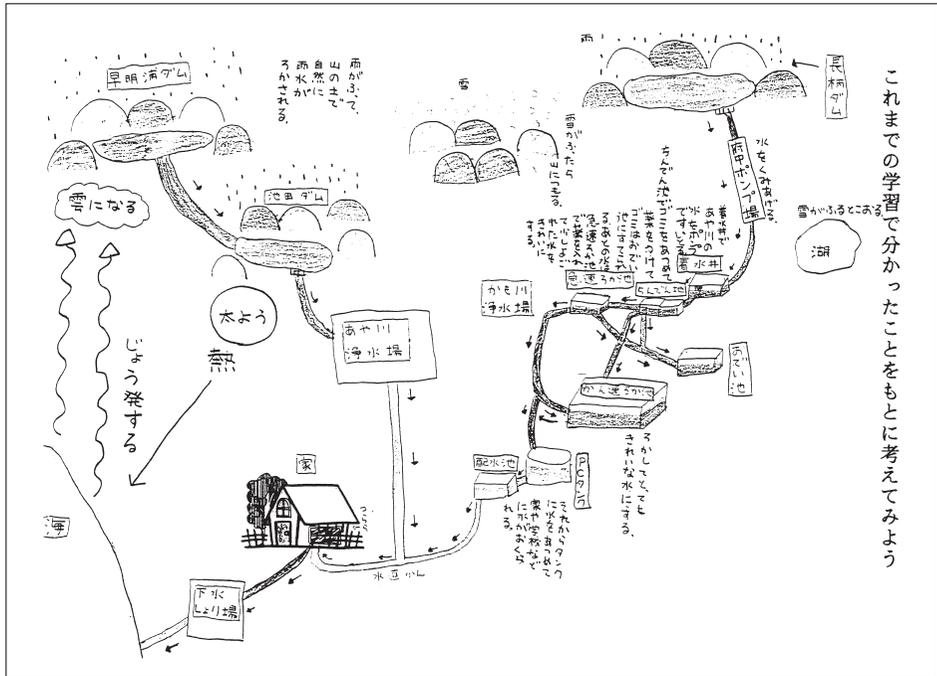
さらに人間が使っている水の量を示す資料や、人間が水を汚している写真資料などをもとに、「水を大切にするために、水を汚さないために」という二つの視点から、私たちが気をつけなければならないことについて話し合った。水を汚さないためにも、廃油利用について考え、家庭で廃油を使った石鹸作りに取り組んだ子どももでるなど、少しずつ水を汚さない工夫を実践化しようとする態度が見られるようになった。

子どもたちが「水の循環図」としてまとめた流れ図は、資料5のとおりである。

5 授業実践2

4年 総合学習「久米通賢とふるさと坂出」

資料5
A児の学習
後の水の流
れ図



(1) 総合学習の構想

総合学習は、自らの生き方を探究する学習である。これを実施するにあたり、次のような配慮を行った。

各教科や特別活動の教育内容を厳選して、総合学習にあてる時間（93時間）を生みだす。

年間を通したテーマを設定する。

総合学習を立案する時には、直接体験が可能であり、また地域の人から直接学ぶことができるという点から、地域に学習材を求める。

体験と表現の一体化を図り、子ども一人一人の問題解決能力をはぐくむことができる単元構想をする。

時間割のうえで、子どもが自由に試行錯誤できるように、授業時間の弾力的な運用を図る。

このようにして、「体験と表現活動の一体化」と「課題意識の連続・発展」を特色とする総合学習の実践が進められた。

(2) 体験と表現活動の一体化

久米通賢と塩田についての学習

第一次では、西光寺支坊にある久米栄左衛門の墓などの史跡見学体験から、坂出と久米通賢とのかかわりや塩田について話し合った。また、3年生の時の総合学習「たんけんゆめのまち坂出」において学習したことをもとに、「久米通賢」という人物について話し合った。「肖像画から見ると、苦労した人のようだ。」「おじいさんの話によると、ぼくの家の辺りは昔塩田だったそうだ。」などふるさと坂出の昔の様子をイメージすることができた。そして、久米通賢についてももっと調べてみたいという課題意識が高まってきた。

次時までに家庭で久米通賢について調べてきてごらんという投げかけに、多くの子どもたちが家庭でおじいさんなどに話を聞いてきた。子どもたちは調べたことをまとめる時に、「年表で表したい。久米通賢のエピソードを劇やペープサートや紙芝居で表したい。」などと多様な表現を考えた。そこで、「劇」「紙芝居」「ペープサート」の三グループに分か

れて業績や人物像などを調べ、自分が選んだ表現物を作り上げることにした。

春の遠足で久米通賢と縁が深い塩竈神社、坂出神社がある聖通寺山に登った。久米通賢が坂出塩田作りを決意した聖通寺山中腹から、現在の坂出の臨海部の様子を観察したり、久米通賢像をじっくりと観察したりした。そして、久米通賢が開いた坂出塩田が、今は住宅地や工場に変わった様子をスケッチした。

春季大運動会では、「坂出塩田で働く人々」というテーマで表現活動を行った。昔から伝えられてきた「塩田小唄」「浜引き歌」などの踊りや、浜での実際の作業の様子、当時の苦労話、塩田作業で欠かせない柄振や馬鍬、金鍬などの道具の使い方などを、地域の人から教えていただいたので、当日は、子ども

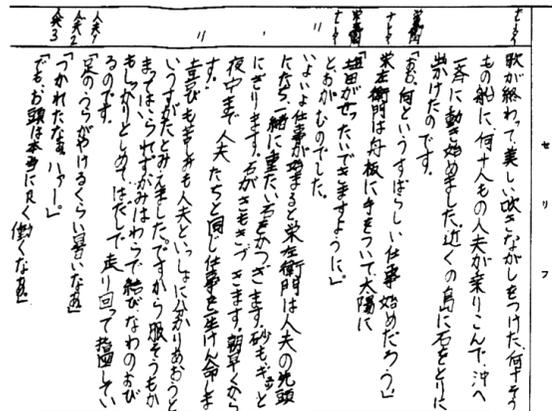
ちは一生懸命に浜を引く演技ができた。

「劇」グループの学習

台本作りを担当した子どもは、資料を読み取り、一人一人が各場面ごとの劇のシナリオを作ってきた。3年生の時に劇の台本を作った経験を生かして、資料6のような台本が完成した。その台本をもとに、場面ごとに配役を決め、大道具、小道具などを分担し、それぞれが協力して進めていくことにした。

子どもたちは、幼少期のエピソードや伊能忠敬との出会い 聖通寺山での塩田作りの決意などを、せりふとゼスチャーを入れながら演技した(資料7)。また大道具作りの子もたちは、坂出浜の大きな背景画など、それぞれの場面に必要な絵を描く活動を進めていった。

資料6 台本



塩作りの体験活動

各グループで塩田が完成した場面の表現物を作っていく過程で、子どもたちの間から、「久米通賢が作った塩田は、どんなものだったのだろう。」「どれくらいの広さかな。」という問いかけが生まれた。子どもたちは地域にある郷土資料館などに展示してある入り浜式塩田の写真などからしか塩田についての情報は得られない。「入り浜式塩田の広さ、構造、塩作りの作業」などは、実際に子どもたちが手や足を使って体験してみないと、真夏の照りつける太陽の下で馬鍬などで砂を引く苦労など、塩作りの大変さを感じ取ることができない。そこで、宇多津産業資料館で、入り浜式塩田の作業体験をさせることにした(資料8)。

資料7 劇の練習をしている子どもたち



昔、塩田で働いていた人から実際の様子を教えていただくことで、大変な作業だったのだということを通して学ぶことができた。朝の仕事、昼の仕事、夜の仕事といくつかの作業工程に分かれ、それぞれの工程で汗みどろになって働いていた人々の当時の様子を体感すること

ができた。

そして、「実は、中央小学校にも塩田があるんだよ。」という教師の助言から、中央小学校の「入り浜式塩田」で塩を採ってみたいという声が高まってきた。

しかし、現在の状態では塩は採れないことが分かり、塩田の修復を行うことになった。2mあまりの沼井の中や周りの土を掘り出したり、修理したり、新しい砂を入れたり、子どもたちは必死で作業をした。その過程で、塩田作りの作業がどれほど大変だったか、実感として感じ取ることができたようである。そして、沼井の中の塩のついた砂に海水を入れ、下からかん水が流れ出た時には、子どもたちの間から歓声がわき起こった。かん水を煮込んで塩を採集し、口に含んだ子どもたちの間から、「食塩よりもずっとからい。」「粒が大きいな。」などという声のでて、初めて採った塩の感触を楽しむことができた。

こうした体験活動を通して「紙芝居」「劇」「ペープサート」の各グループで独自に表現してきたことで、他のグループの表現も参考にしたいという意識が生まれてきた。そこで、他のグループのよりよい表現方法に学び、さらに自分たちの表現を場面に合うように作り替えようという課題から、相互交流を行った。その中で例えば、劇グループは、ペープサートグループから効果音の取り入れ方について学ぶことができた。こうして、各グループで工夫した点について相互に学び合うことで、より質の高い表現が生まれてきたように思われる。

(3) 課題意識の連続・発展

子ども自身の学習計画の立案

子どもたち自身で学ぶ見通しを持つために学習計画について話し合い、資料9のような計画表を立てた。

1学期には「久米通賢の一生を劇で表現したい。」、2学期には「塩作りの歴史や製塩法

資料8 塩作りの体験活動



資料9 子どもが考えたビデオ作成計画

5月	9月	10月
台本づくり	①漁について作り くわえていく。	ビデオへん集
久米の勉強		
6月	10月	1月
役づくり		ビデオ完成
		甲斐小祭り
7月	11月	2月
場面をビデオにのこ	へん集して 場面を決める。	

資料9の台本づくりの計画表
 毎週毎週の台本づくりになりました。全部をたくさん入れて、とてもおもしろくて、分かりやすい台本づくりたいなあとおもいます。がんばりたいです。

について調べ、表現につけ加えたい。」、3学期には「それらを編集して中央小子ども祭りで全校児童に発表したい。」というめあてができた。

また、「劇」というビデオ番組を作るために必要な活動について話し合いを進め、台本を作る、配役を決める、セリフを覚える、大道具を作る、小道具を作る、歌を作るなどの活動が生まれた。そして場面分けをして、それぞれの年代ごとにどんな場面が必要かを話し合い、台本作り、大道具作りなどの役割分担を決めて、表現に取りかかった。その表現活動の過程で、友達とともに学び合ったり、自分の考えを修正したりする拡充性も育ってきた。

めあてカードの活用

総合学習は、子どもたち一人一人の興味・

資料10
学習のめあて
カード

学習のめあて		6月30日
紙は「グループ」の表現から学が自分の表現に付け加わろう。		
(学習をよりかえて)		
めあてをもって、進んで活動できたよ	<input checked="" type="checkbox"/>	
友達といっしょに話し合いに参加できたよ	<input checked="" type="checkbox"/>	
新しい発見やくふうができたよ	<input checked="" type="checkbox"/>	
次の時間のめあてがはっきりもてたよ	<input checked="" type="checkbox"/>	

(次の時間までのわたしの活動)

ペーパー「グループ」から学んだお話を
 先生に話して、みんなの前で発表し
 たい。みんなの意見も聞いて、自分
 の表現をよりかえたい。

関心に基づいて、自分で学習を作っていくことがねらいとなる。子どもたちが自分が立てた計画に基づいて、どれだけ取り組むことができたか、学び方などについての自分自身による評価を重視したい。このような自己評価によって子どもたちの自分自身についての理解（自己概念）が形成される。

そこで、毎時間の学習のめあてを子ども自身が明確に持てるように、一人一人に「学習のめあてカード」を配布しておき、毎時間の学習の終了時に自分の活動の評価と次時の活動のめあてを記入させるように設定した（資料10）。「今日は塩田の沼井を塗ることができたので、次は久米通賢の絵を入れて、完成させたい。」など、学習の到達度と次の学習の目標や学び方がつかめるように配慮した。

6 成果と課題

(1) 成果

総合学習に取り組んできた成果として、なにより子どもの学習意欲が高まってきたことが挙げられる。「次の時間は、こんなことをしたいな。」という子どもの側からの声が増えてきたことや、多様な価値ある体験を経験し、多様な表現方法を学ぶことによって、教科を越えた柔軟な問題解決能力が育ってきていることを感じている。体験する中で、人に対する思いやりの心や友達と高め合う学習、情報収集の仕方など、真に「生きてはたらく力」が身につく。また、教科統合によっても教科の枠を越えた学び方が可能になり、

「水」についての一人一人の意識が高まり、実践化に少しずつつながっているようである。

(2) 今後の課題

これからの課題としては、総合学習での一人一人の学習の深化を見取るための教師側の評価をどうすればよいのか、また社会科でのねらいと総合学習でのねらいの違いを明確にすることなどがあげられる。また、教科統合によって時間数の厳選を図ることもねらいとしたが、2教科のねらいを同時に達成する方法についても、今後考えていかなければならない。子どもはまだ教科の枠を強く感じている。

今後も、総合学習を核にした教育課程を編成し、実践を積むことによって、子どもたちがたくましく「生きる力」をはぐくんできていけるよう、実践を進めていきたい。